

★無限等比級数の和

$$\begin{aligned}V &= \frac{F}{(1+k)} + \frac{F}{(1+k)^2} + \frac{F}{(1+k)^3} + \frac{F}{(1+k)^4} + \dots \\(1+k)V &= F + \frac{F}{(1+k)} + \frac{F}{(1+k)^2} + \frac{F}{(1+k)^3} + \frac{F}{(1+k)^4} + \dots \\kV &= F \\V &= \frac{F}{k}\end{aligned}$$

★FCFの式の意味(P374)

$$\begin{aligned}\text{FCF} &= \text{資金提供者である債権者・株主に対して自由に分配できるCF} \\&= \text{財務活動によるCFの原資} \\&= \text{営業活動によるCF} - \text{投資活動によるCF} \\&= \text{NOPAT} + \text{減価償却費} - \text{正味運転資本増加額} - \text{設備投資額}\end{aligned}$$

◎営業活動によるキャッシュ・フロー(間接法)での調整項目

税引前当期純利益に対して、以下の調整を行う。

- ① 非資金損益項目
- ② 営業活動に係る資産及び負債の増減
- ③ 営業外損益、特別損益項目

③は、基準上の文言は、

「投資活動によるキャッシュ・フロー」及び「財務活動によるキャッシュ・フロー」の区分に含まれる
キャッシュ・フローに関連して発生した損益項目

また、NOPAT(税引後営業利益)からスタートすることで、小計欄の下で控除する法人税等も加味できている。

結局、「NOPAT + 減価償却費 - 正味運転資本増加額」によって、
管理会計論上は、営業活動によるキャッシュ・フローが算定できると考えてよい。

★【例示10-10】企業価値と負債価値・株主価値(P380)

この、客観的に評価した株主価値350億円の会社の発行済株式総数が1億株であって、
東京証券取引所に上場しており、株価が300円であれば、
この会社は株主価値(時価総額)は、その時点では300億円と、マーケットにおいて低く評価されていることとなる。
そのため、「買いだ！」という判断になり、仮に、350億円で買収しようとした際に、
同社の資産・負債を時価評価した結果、株主価値(時価総額)が320億円であれば、30億円ののれんが発生する。